

居酒屋

ほったくり

秋川澁美 Takimi Akikawa

3

# 目次

再会の春……………245

冬が終わりを告げる日……………197

木枯らしが吹く季節……………155

距離の取り方……………119

本来の価値……………61

猫の絆 人の絆……………5

猫の絆

人の絆

トキトキと時空を繋ぐ絆

絆山とくーの絆

絆山とくーの絆

空の色がぐっと深まり、街路樹の色が緑から黄色、そして朱へと移っていく。日中はまだ暑さを感じる日もあるけれど、もうエアコンがなくても凌げる。一年中で一番過ごしやすい季節の到来だった。

東京下町にある居酒屋『ぼったくり』。

物騒な店名は、『誰でも買えるような酒や、どここの家庭でも出てくるような料理で金を取るうちの店は、もうそれだけでぼったくりだ』という父の口癖から常連たちがつけてくれたものだ。命名にあわせて彼らから贈られた暖簾は、夕方が夜にかわりかけるころ、ひっそりと戸口にかけられる。店を大切に営んでいた両親が亡くなった今も――

『ぼったくり』店主、美音は暖簾を店の外に出し、何匹か群れをなして飛んでいく赤とんぼに目をやった。

「あ、アキアカネだ。やっと下りてきたんだね」

水を入れたじょうろを片手に出てきた妹の髻が、ほっとしたように言う。

今日は風が強いので打ち水でもして舞い上がる土埃を抑えようということらしいが、バケツと柄杓ではなく、じょうろというのがいかに彼女らしい。髻は、そのほうがまんべんなく水を撒けていい、と言うのだが、美音から見ればいささか情緒に欠ける。

だが今は、その情緒のなさよりも、赤とんぼが飛んでいることに安心して様子の方が気になった。しかも彼女は『下りてくる』と表現している。

「どうして？ 赤とんぼなんて夏からずっと飛んでたでしょ？」

「ナツアカネはけっこう飛んでただけど、アキアカネは今日が初めてだよ。さっきのとんぼの中に、目まで赤いのは一匹もいなかったでしょ？」

ナツアカネのオスは目まで赤くなるらしいから、あれはきっとアキアカネの群れだよ、と髻は付け足した。

「あら……そうだった？」

「アキアカネって、夏の暑い間は山に行ってるんだって」

ナツアカネとアキアカネはまとめて赤とんぼと呼ばれることが多い。どちらも梅雨ごろから秋の終わりまで生息するとんぼだが、生まれてから死ぬまで平地で過ごすナツアカネと異なり、アキア

カネは夏の間、暑さを避けるように山間部に移動する。だから夏の間は街中で見かける赤とんぼは、ナツアカネである。

本当にアキアカネが暑さを避けるために山に向かうのか、真偽のほどはわかっていないのだが、夏の盛りを過ぎ、気温が下がり始めたころ、平地に戻ってくることから『アキアカネは避暑に行く』というのが通説となっているらしい。

そんなとんぼについてのトリビアをちよつと自慢げに披露したあと、今年はアキアカネが下りてくるのが遅かった、と馨は言った。

「うんざりするような暑さだったから、このまま山から戻ってこないんじゃないかって心配してたんだよ。いや、よかったよかった」

空に映えるアキアカネの群れを見ないで冬を迎えるのは寂しい。何よりも、山では上手く繁殖できないのではないかと、心配していたのだと馨は言う。そして馨は飛んでいくアキアカネの群れに、発破をかけた。

「こんな街中にいないで、早く田んぼとか池のあるところに飛んでくんだよー！」

日頃は元氣一杯で、ちよつとやんちゃが過ぎるように思えることもある馨だけれど、アキアカネを思いやる優しさがある。それでいて、道の端を伝うように歩いていた蟻が、いきなり降り注いだじょうろの水に慌てふためく様子を大笑いしたりもするのだから、我が妹ながら面白い。

逃げ惑う蟻に、ごめんごめん、なんて謝っている馨を見て笑っていた美音に、ちよつと歩いてきたふたり連れの女の子が声をかけた。

「美音さん、こんにちほ！」

「ああ、早紀ちゃん。こんにちほ。どこかにお出かけ？」

「はい。ちよつとお友達のおうちに」

「あらいいわね。でも、すぐに暗くなっちゃうから気をつけてね」

「はい。ありがとうございます」

軽く会釈して通り過ぎていく早紀を見送り、美音は首を傾げた。

「珍しいわね……制服のままなんて」

普段の早紀は、学校帰りに寄り道などしない。買い物にしても、友達と遊ぶにしても、一旦家に帰ってちゃんと着替えてくる。土用の丑の日が迫ったころ、制服のまま『スーパー呉竹』にいたことはあるが、あれは例外中の例外。鰻の値段が気になってならなかったからだろう。

その早紀が制服のままどこかに向かうなんて、何か特別な用事でもあるのだろうか。特に急いでいるようにも見えないけれど……

美音は少し気にしながらも、水を撒き終えた馨と一緒に店の中に戻った。

「馨ちゃん、俺にビール！ こいつにはいつもの！」

「はいはい、ラドラーね」

引き戸を開けるなり、声を上げたのはアキラ。後ろから後輩のカンジも入ってきた。ふたりは電気製品取付会社に勤めている。今日も一日の仕事を終え、『ぼったくり』で一杯やろうとやってきたのだろう。

アキラは典型的な『とりbeer』派。何が何でも一杯目はビールだ、と譲らない。一方、汗かきで酒に弱いカンジはビールをレモンソーダで割ったラドラーがお気に入り。ほんのり甘くて呑みやすく、三杯呑んでもビール一杯と同じぐらいのアルコール量にしかない。

ふたりは上機嫌で飲み物を受け取って、早くも汗を掻き始めているグラスをかちんと合わせる。

「お疲れさん！ 俺たち、今日もよく頑張ったよな！」

「うっす！」

それぞれがごくごくグラスの中身を呑み始め、見事なぐらい同じタイミングで「ぶはーっ!!」と息を吐いた。

「ちぎしようめ、もう、どうにでもしやがれ！ かい？」

隣に座っていたウメが、アキラが言おうとした台詞セリフをさくつと横取りした。

ウメは父の代からの常連で、三日に一度現れては焼酎の梅割りを注文する。昔、芸者をしていたという彼女は「女は腹を冷やしちゃだめだ」が信条で、夏でも冬でもお湯割りを好む。

今日もしよっぱい『ぼったくり』自家製の梅干しを箸でつついて焼酎に馴染なじませながら、ゆっくりとお湯割りを楽しんでいた。

「ひでえよ、ウメ婆お婆！」

台詞を奪われたアキラが、恨めしそうにウメを見た。ウメはクスクスと笑いながら謝る。

「ごめんよ。あんまり気持ちよさそうだから、つい、ね。それに、あんたにその台詞はなんか似合わないよ。やっぱりトクさんぐらいじゃないと」

いろいろな経験をして酸いも甘いも噛み分けてこそ、真実味を帯びてくる台詞がある。若者が言う『どうにでもしやがれ』と年寄りの言う『どうにでもしやがれ』は重みが違う。年寄りに似合いの台詞を若いもんが粋いきがって使っても滑稽こっぴなだけだよ、とウメは主張した。

ウメの言葉にトクは自慢げに鼻を鳴らし、アキラの肩をばんつと叩いて言う。

「ま、おめえはまだまだ修業不足。あと二十年もしたら俺みたいに『年季が入って』いい具合になるさ。それまでは大人しく『やべえ、旨すぎー！』とでも言っつてな」

「リョウウじゃあるまいし！」

いいじゃねえかよー何を言ったって、この国には言論の自由ってもんがあるだろ、とぶつぶつ言ったあと、アキラはカウンターの向こうの美音に声をかけた。

「美音さん、腹が減った。なんか旨いものいっぱい出して！」

「アキラ、美音坊が旨くないものを出したことがあるってえのか？」

「そうそう、この店では水一杯にしても不味いものは出てこないってご存じないのかい？」

「勘弁してくれよ。ふたりとも、今日は一段と……」

アキラは、自分をからかい続ける年寄りふたりにお手上げの様子だった。

年寄りの常連たちは時折、こんな風に若い常連にちよっかいを出して楽しむが、特にアキラはその的にされるが多かった。世の習いをあれこれわきまえていて、年長者を敬う気持ちもちゃんと持っているアキラは、『年寄りの遊び』への許容量も大きいと判断されているのだろう。

敵わねえ……とばかりにカウンターに突っ伏したアキラを見て、カンジが小さく笑った。

おそらく、自分に説教ばかりしている兄貴分のアキラが、ふたりがかりでやり込められているのがおかしかったに違いない。

アキラはそんなカンジを横目でじろりと睨み、軽いため息を漏らした。

「ちえ。この店じゃ俺なんてまだまだひよっこだからなあ。やられっぱなしだぜ」

「とかなんとか言って、アキラさん、本当はこうやっていじられたくてここに来るんでしょ？」

「カンジ……」

クマのように大きな身体なのに、まるで子どもみたいに、にこにこ笑いながらカンジは言う。

アキラは仕事の腕も上がり、もう誰かに文句を言われることもない。むしろカンジたち後輩を指導することがもつぱらになっている。

だが、アキラ自身はそんな状況を、少々居心地が悪いとと思っているようだ。

会社に入りたてのところみたいに、叱られることで成長したいと思う気持ちもある。誰からも叱られないというのは、楽なように見えるが、成長の機会を失うことでもある。たまには親身になってくれる誰かに叱られたい……

カンジは、アキラがそう感じているのではないかと想像したのだろう。そして、アキラが微かに頬を染めたところを見ると、どうやらそれは当たっていたらしい。

「まったく、お前まで……。今日はよっぽど日が悪いんだな」

そう言いながらもアキラは、本当は不快には思っていない。なんとなく笑みがこぼれる寸前に見える彼の表情がその証拠だ。ぶつぶつ言うのはアキラ特有の照れ隠し。その照れようが可愛らしくて、さらに年寄りたちを喜ばせているの知らないのは本人ばかり。

困り事の相談は最優先。みんなして真剣に考えるけれど、難しい話がないときは純粹に楽しむ。

悪のりしているように見えても、本当は相手のことを考えていて、お互いに構ったり構われたりしている。

常連たちは『ぼったくり』は居心地のいい店だと褒めてくれるけれど、その居心地のよさを作り上げているのは常連たち自身だった。

——私にできるのは、せいぜいみんなのお腹を満足させることぐらい。だから、せめてそこだけは一生懸命頑張らないと。

美音はそんなことを思いながら、年寄りふたりにいじられているアキラに品書きを差し出した。

「まあまあ、アキラさん、ご機嫌を直して『本日のおすすめ』でもご覧ください」

「おう！ で、今日のおすすめはなんだ？」

美音から受け取った品書きに目をやったアキラが歓声を上げた。

「やったー！ 牡蠣だー!!」

「旨えぞ、牡蠣フライ」

「酔のものもあつさりして美味しいよ」

トクとウメが同時に声をかける。だが、アキラはふたりの意見などまるで無視だった。

「俺は牡蠣は……」

「ベーコン巻き、レモンたつぷり！ でしょ？」

「そのとおり！ さすが美音さん！ あ……でも……」

アキラは、隣のカンジにちよつと目をやったあと、ふたり分の生牡蠣を取り出した美音をためらうように見た。カンジはなぜか少し困った顔をしている。

「カンジさん、牡蠣は苦手？」

カンジは大きな身体を縮めて、申し訳なさそうに頭を下げる。

「牡蠣ってえのは、好き嫌いがはっきり分かれるな。だが、食わず嫌いなら一度試してみたらどうだ？ なんなら俺の牡蠣フライ、食ってみるか？ この酒と一緒にやればもつといいんだが……」

そう言ったあとトクは、ラドラーのグラスを抱えているカンジに、おめえは弱いしなあ……と苦笑いをする。そのとき、ちよつとトクにお代わりを注ごうと美音が出した瓶を見て、アキラが嬉しそうな声を上げた。

「あ、『あかとんぼ』だ！ そつか、もうそんな時季かあ」

「お待たせしました。今年もひやおろしの季節です！」

「お、アキラ、おめえはビール党のくせにこの酒を知ってるのか？」

トクはちよつと不思議そうな顔をしてアキラを見た。外仕事でのどをからからにしてやってくるアキラは、一杯目はまずビール。日本酒や焼酎といった他の酒が嫌いというわけではないが、二杯目以降も、ビールを飲み続けることが多かった。そのアキラが日本酒に興味を示したのが解せなかつ



たのだろう。その疑問に答えたのは馨だった。

「トクさん、アキラさんはこのお酒そのものよりも、名前とラベルがお気に入りなんだよ」

「馨ちゃん、その言い方は切ないぜ」

アキラは思いつきり不満の意を表明する。

『あかとんぼ』は栃木にある株式会社せんきんという蔵が造っている酒である。この蔵は酒に『かぶとむし』『線香花火』『雪だるま』といった風雅な名前をつけている。しかも、同じ酒でも、何種類かの異なるラベルがあるのだ。美音は毎年、季節に合わせてこの蔵の酒を仕入れるのだが、注文を出したあと、自分の手元にどんなラベルが届くかを楽しみにしていた。おそらくアキラも夏のカブトムシから秋の赤とんぼ、そして冬の雪だるまと変わっていく酒の名とラベルで季節を感じているのだろう。

ビール党とはいえ、日本酒の美味しさだってちゃんとわかっているアキラにしてみれば、名前とラベルだけがお気に入りと言われるのは心外に違いなかった。

「俺だってひやおろしの旨さは知ってるよ。特にこの酒、香りはなんかケーキかクッキーみたいな甘い感じなのに独特の酸味があるんだよ。そのバランスがなんとも言えねえ……」

と得意げに説明をするアキラを、トクが遮った。

「おめえが言ってるのは、これとはまた別の酒だな」

「え？ ラベルが変わってるだけじゃねえのか」

まじまじとラベルを見ているアキラに、美音が説明する。

「これはね、今年の新製品なんですって。酸味がとてもすっきりしてるし、桃やぶどう、それにドライマンゴーやイチジクがまざったみたいな香りがすごく素敵なんですよ」

「ケーキじゃなくてミックスジュース系なのか」

「アキラさん、ミックスジュース系って……」

馨は呆れたように言うが、美音はアキラの表現は、いかにも彼らしくていいと思う。おそらくアキラはいくつかの果物が合わさったような香りだと言いたいのだろう。酒を表現するにはちよつと問題ありかもしれないが、あながち間違っではない。

「とにかく、ひやおろしはひやおろしだ！ こいつが出てきたってことは、秋ももう本番だ！」

「確かにな」

きっぱりと言い切ったアキラに、トクは異存なし、と頷く。

酒瓶に貼られたラベルには『仙禽 あかとんぼ 秋上がり』と書かれている。春に造った酒を一夏寝かして出荷する『ひやおろし』は秋限定の酒であるが、この酒は名前に『秋上がり』と入れられているように、十月の声を聞いてから出荷される、まさに秋本番の酒だった。

「この酒は牡蠣フライ、しかもタルタルソースじゃなくて俺が好きな普通の中濃ソースをかけた奴

にびったりだ。多分他の揚げ物でも合うだろうな。酸味がレモンの代わりになるからかもしれない。だがまあ、おめえの呑んでるラドラーはレモンジュースも入ってるし、それはそれでいいかもな」

カンジにトクが説明する。

「へえ、ソースに合う日本酒か……それは珍しいっすね」

「牡蠣が苦手でも、美音坊の料理なら、案外、気に入るかもしれないぜ。ちょっと食ってみるか？」と誘いをかけたトクを、アキラが慌てて止めた。

「ストップ！ トクさん、悪いけどこいつ、アレルギー持ちなんだ。牡蠣は一発アウト。だから、勘弁してやって」

「ああ、そうか。そいつは悪かった」

トクはすぐさまカンジに謝る。カンジは、とんでもないっす、と手と首をぶんぶん振った。

後輩の苦手なものまでちゃんと覚えてるアキラは、本当に面倒見のいい先輩なのだろう。カンジは口下手だから、俺が何とかしてやらないと……と思ってるのかもしれない。

いい兄貴分だね、とウメに褒められ、まんざらでもなさそうな顔でアキラは言う。

「ということ、美音さん。こいつにはなんか別のもん出してやって」

「了解。じゃあ……」

冷蔵庫の中身を思い出しながら、カンジの顔を見た美音はうっかり吹き出しそうになる。

カンジの顔にはいつもどおり「肉・肉・肉！」と書いてあった。

「ベーコンとレモンがあるんだから、牡蠣の代わりに豚ヒレを巻きましょうか」

「あ、それ旨そう！」

カンジがぱーっと顔を輝かせる。美音はほっとして豚ヒレ肉を取り出した。

「お姉ちゃん、それ、あたしがやるよ」

馨が豚ヒレを引き取って一センチぐらいの厚みでそぎ切りにし始めた。牡蠣に比べれば豚ヒレは下拵したしごえが断然楽なので馨に任せ、美音は牡蠣にとりかかる。

牡蠣を洗うのに片栗粉や塩水を使う方法もあるらしいけれど、美音はできる限り大根おろしを使う。牡蠣特有の生臭さを抑える効果を期待してのことである。洗うだけだから辛くても粗くても平気、とばかりに美音は大根をがりがりと摺すりおろす。勢いよくおろした大根をボウルの中に入れた牡蠣にまぶし、汚れや滑りぬめをとっていく。

「もったいないなあ……その大根おろしだけでどんぶり飯が食べそう……」

アキラはそんなことを言っただけで嘆く。

「でもこの大根、ちよつと鬆すが入っちゃってるから、そのまま食べても美味しくないのよ」

「え、なんでそんなものが紛れ込んだんだい？ ヒロシのすつとこどつこいめ、これはひとつ……」  
『ぼったくり』にそんな使い物にならない大根があるなんておかしい。八百源やっおげんのヒロシがやらかし

たのかい、とウメは今にも文句を言いに行きそうになる。

「違うんです。これはヒロシさんが厚意で下さったんです」

如何に目利きのヒロシとはいえ、箱単位で仕入れれば具合の悪いものも含まれる。見かけだけの問題なら値を下げて売ればいいが、明らかに不味いとわかってるものは店に出せない。八百屋のプライドに関わる、とヒロシは息巻く。今日も箱で仕入れた大根の中に、そんな一本が紛れ込んでいたらしく、八百屋の前を通りかかった美音に声をかけてきたのだ。

「美音坊、近々牡蠣を商う予定はねえか？」

「あら、ちょうど明日あたり、おすすめに入れようと思ってたところなの。どうして？」

「八百屋の勘つてやつに引つかかってよ、ちよいと葉を折ってみたら鬆が入ってやがってさ。売りもんになんねえし、かといって捨てるのもなんだし……」

せめて牡蠣の掃除にでも使ってやってくれよ、と笑いながら、ヒロシは大きな大根を渡してくれたのだ。

「そうかい。それは悪いことを言った。いいところあるね、さすがは町内会長だ」

「ほんとに。おかげで今日の牡蠣の仕上がりは上々です」

そういった細かい気配りができるからこそ、ヒロシは町内会長を任されているのだ。人によつては嫌がるような面倒な仕事を、何年も続けて引き受けてくれているヒロシには感謝してもしきれな

かった。

ありがたいことだね、と言うウメに頷きながら、美音は掃除を終えた牡蠣をフライパンで煎る。軽く水分が飛んだあたりで火を止め、ベーコンを巻き付けて楊枝で留めたら下拵え完了である。

「お姉ちゃん、こっちもできたよ」

薄く塩胡椒した豚ヒレ肉にベーコンを巻き付け、牡蠣と同じく巻き終わりを楊枝で留めた馨が声をかけてくる。

「では、ご一緒に」

美音が軽く微笑むと、馨もにっこり笑って応え、姉妹は仲良く並んでコンロの前に立つ。

牡蠣は小さいフライパン、面積をとる豚ヒレ肉は大きめのフライパン。牡蠣は強火で、豚ヒレ肉は中までしつかり火を通したいのでちよつと弱火で……

姉妹がそれぞれ真剣な顔で料理する様を見ていたトクが、にやりと笑った。それに気付いたウメが怪訝な顔になる。

「なんだい、トクさん。急に笑ったりして気味が悪いね」

「いや、面白いなあと思ってさ」

「なにが？」

「同じベーコン巻きなのに、フライパンの大きさも焼き方も対照的。まるで美音坊と馨ちゃんみた

いだなあって」

「ああ、そういうこと。確かにこのふたりは何もかも対照的だね。でも……」

「気のいい働き者ってところは同じだな！」

「アキラー!! 今あたしが言おうと……」

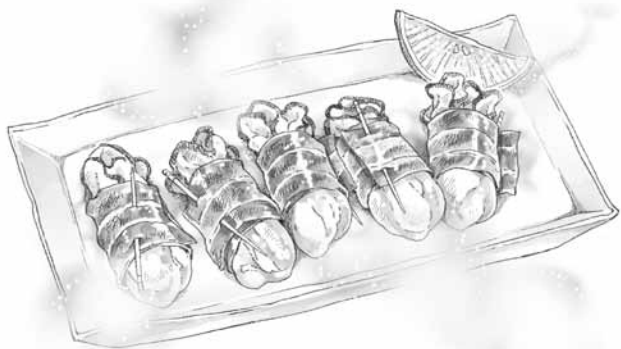
一番いい台詞を攫ったアキラにウメが不満の声を上げる。

アキラは涼しい顔で、さっきのお返しだーい、なんて笑いながら焼き上がった牡蠣のベーコン巻きを受けとった。添えてある鮮やかな黄色のレモンをぎゅっと絞り、楊枝をつまんでぱくり……

「おぉーっ！ 口ん中が海だぜー！」

強火でしっかり焦げ目がついたベーコンのかりっとした歯触りのあと、牡蠣の柔らかい食感がくる。乾煎りして水分を飛ばしたおかげで濃縮された牡蠣のエキスは、まさに『海のミルク』と呼ぶに相応しい味わいだった。

アキラは、美音が新たに注いだビールを一気に喉に流し込み、



カウンターに突っ伏して足をばたばたさせる。

「くーーーーーっ！」

「賑やかな男だな、おめえは。ちよつとは大人しく呑み食いしやがれ」

呆れたようにトクは言うが、美音はストレートなアキラの反応が嬉しくて仕方がない。

こういう大げさなぐらいのアキラの反応を見て、同じ料理を注文してくれる客がたくさんいるからだ。同じことを思ったら嬉しい響が、取りなすように言った。

「いいんだよ、アキラさん。もう、存分にばたばたしてて！ アキラさんに釣られて注文してくれるお客さん、けっこう多いんだから！」

「確かにアキラさんを見ると、俺もちよつと食ってみたく……」

「やめとけー！」

「およしよー！」

「とんでもねえー！」

アキラ、ウメ、トクの三人が同時にカンジを止めた。響は慌てて、焼き上がったばかりの豚ヒレのベーコン巻きを差し出す。

「はいはい、カンジさんはこっちー！」

火が十分に通ったあと、最後に強火で仕上げたのでこちらもベーコンはカリカリ。ただし、中身

は豚ヒレ肉だからポリューム満点。

カンジは受け取った皿をカウンターに置くなり、ベーコン巻きのひとつにかじり付いた。

「あっちー!!」

大声を上げ、慌ててラドラーをぐくぐくと呑む。じつくり焼かれた豚ヒレ肉は予想以上に熱を持っているらしい。ラドラーで口の中を冷ましたカンジは、懲りもせずに熱々の豚ヒレベーコン巻きを口に入れる。ぱらぱらと申し訳程度に振られた塩は、ベーコンの塩気に助けられてちょうどよい加減。さらに、脂気が少なくなくて焼いただけではつまらない味になりがちな豚ヒレ肉を、ベーコンがまろやかに仕上げている。

「厚めのベーコンを使ったから、脂がぐどいようならレモンをたっぷり搾ってね」

「ぜんぜん!」

カンジの目は『俺はこれぐらいポリュームがあるほうが嬉しいです』と語っている。口に出さなのは、聲に返事をする間も惜しいかららしい。

大きくかじり取っては、あぐあぐと咀嚼してぐくん。そしてまたラドラー……。カンジは絶え間なく口を動かした。それを動かした。

それを見ていたトクが、また首を振る。

「おめえも落ち着きがないなあ……。アキラにそっくりだ」

「俺の弟分だから当然だ」

アキラは、なーつ、とばかりにカンジを見る。カンジも嬉しそうに頷く。

仕事でもそれ以外でも頼れる先輩。カンジにとってアキラは、本当の兄のような存在なのかもしれない。だからこそ、カンジは仕事を終えたあとも、こうやってアキラと一緒に過ごすのだろう。

「ま、仲がいいってのはけっこうなことだよ。本当の兄弟でもそうじゃなくても」

「兄弟って言えば、ウメさん、クロは元氣？」

三つ目のベーコン巻きを呑み込んだアキラが訊ねた。

「なんない唐突に……」

「いや、兄弟仲良くって聞いたなら、急に思い出してさ。うちのミクとクロって兄弟じゃん」

「あ……そうか。そーいやそーうだったね」

夏のはじめに公園に捨てられていた五匹の子猫。まだ目も開いていない状態で、育つかどうか不安だったけれど、常連たちと美音姉妹の協力でなんとか五匹全部の命を繋いだ。

そのあと子猫たちは一匹ずつ常連たちに引き取られた。

ウメは腹の一部だけが茶色で残りが真っ黒な『クロ』。アキラは白茶ぶちの『ミク』。マサは茶色が多めの黒茶ブチで『チャタロウ』。同じく黒茶ブチを引き取ったアキは『マツジ』と名前をつけた。

マジなんて随分古風な、時代劇にでも出てきそうな名前だな……と思ったら、人気アイドルグループのとあるメンバーの愛称を途中で切ったらしい。

「さすがに全部そのままって恥ずかしいからさあ」

と、アキは笑っていたが、ペットにお気に入りのアイドルの名前をつける人は多いし、美音にはそんなに恥ずかしいことだとは思えない。それを気にするアキがむしろ微笑ましかった。

そして残りの一匹、一番小さくて弱っていた黒茶ブチを引き取ってくれたのは要だ。

彼は秋の終わりの雨の夜、ふらりと『ぼったくり』に現れて、やがて常連のひとりとなった。『ぼったくり』の面々の悩み事にアドバイスをくれることも多いし、子猫騒動のときは友人だという獣医を紹介してくれた。みんなは美音と馨のおかげだと言ってくれるけれど、美音は五匹全員の命が守られたことの最大の功労者は要だと思っている。

要が引き取った猫は『タク』と名付けられた。けれど、美音は名前の由来までは知らない。そのうち訊いてみようとは思うものの、いつも遅く現れ、ほかの客と顔を合わせることが少ない要とは、猫談義をする機会もない。なんとなく聞きそびれたまま今に至っていた。

「おかげさんで、クロは元気だよ。ミクちゃんはどうだい？ 相変わらず恰幅がいいのかい？」

「恰幅がいいって……それ、デブってことだろ？」

「トクさん、デブって言うなデブって!!」

アキラが食ってかかる。愛猫をデブと言われていきり立つあたり、さすがは自他共に認める『ぼったくり』一の猫馬鹿である。

「デブは言い過ぎだけど、ミクは確かにちょっとヘルシーじゃないですねえ……もうちょっと餌を控えて運動させたほうがいいかも」

しみじみ言うところをみると、カンジはちよくちよくミクを目にしているのだろう。

「カンジ、お前まで……」

「だってアキラさん、ミクが可愛いんでしょ？ 病気とかになったらやばくないですか？」

「病気……」

「そうだよ。猫にだってメタボはあるんだからね！」

馨にまで責められて、アキラはいよいよ居場所がないような顔になる。餌やおやつを欲しがると、ミクに抵抗できない——そんな自分に、飼い主として問題があることはわかっているようだ。

「日中放りっぱなしだし、かわいいそうでついついよお……。それに運動たつて、俺の部屋はワンルームで狭いし、外に出すのは……」

「それは駄目さ。昔ならともかく、今は猫がのんびり外に出られるご時世じゃない。家で飼うのが一番だよ」

「事故に遭ったり、野良猫に喧嘩ふっかけられて怪我してもかわいそうよね」

「美音さんの言うとおり。だから余計に運動不足になるんだよね……」

「だから餌をちよっと控えてさあ」

「ウメさん、皆まで言うな！ わかってる！ わかってるんだけど……あんなに可愛く餌をねだられちゃ……」

「だめだこりゃ」

馨の一言で話が終わってしまいそうになる。ミクはアキラの飼い猫、それならアキラが好きにするしかない……

だが、同じく猫を飼うものとして、ウメは許せなかったらしい。しばらく考えたあと、はつとしたように言った。

「そうだ！ うちに連れてきなよ、うちは戸建てだからあんたんとこよりは広いだろうし、ミクもクロと一緒に駆け回ったら少しは運動になるんじゃないかい？」

「あ、それはいいかもー。いっそアキさんやマサさんにも声かけて猫会にしちゃったら？」

「猫会……」

美音は、それはどうなの、と思いつつながら馨が口にした『猫会』という言葉（つぐや）を呟いた。

家の中を猫が何匹も走り回ったら迷惑ではないだろうか。

聞くところによると、クロは大人しい猫らしいし、ウメもしつかり（しつかり）馴れている。いくら家の中を自由に動き回っているとはいえ、ちゃんと限度はわきまえているだろう。でも、よその猫がみんな同じとは思えない。特にミクは、甘い飼い主のもどでいたずら放題に育っているのではないか。猫会なんて開いたら、猫たちは興奮していつもよりやんちゃになるかもしれない。それではウメが気の毒すぎる……

美音はそう考えて、馨の提案に反対しようとした。けれどそれより先に、当のウメが賛成した。

「それはいい！ 猫だつてたまには兄弟に会いたいだろうし、あたしも賑やかなのは歓迎だよ」

美音にしてみれば、猫に兄弟意識があるかどうか大いに疑問だった。

一緒に暮らしているならまだしも、別々の飼い主に引き取られてからも随分時間が経っている。猫は長く面倒を見てくれた飼い主でさえ、離れてしまえばすぐに忘れる生き物だと聞いた。

親子や兄弟も同じで、再会したところで、それが自分の兄弟だなんてわからないのではないか。

そんな美音の思いをよそに、アキラは早速ウメの提案に飛びついた。

「マジ!? ほんとに連れてついでいい!?」

「ああ、いいよ。今度の休みにでも連れておいで！」

「あたしも行っていい!?」

馨が乗り遅れてはならじ、とばかりに名乗りを上げる。生き物が好きなのに飼うことが叶わな

かった馨が、こんな機会を逃すはずがなかった。

「もちろん。よかつたら、美音坊もおいでよ」

「え……私も？」

「美音坊と馨ちゃんは猫たちの命の恩人だ。大きくなったあの子たちを見たいだろ？」

「やったー！ よかつたね、お姉ちゃん。プチ猫カフェだよ！」

その場でウメとアキラが相談して、次の日曜日にウメの家で猫会を開くことが決まった。

アキラは、興味津々の様子なのに言い出せずにいるカンジを見て、こいつもいいっすか？ とウメの了解を求める。

「もう、猫でも人でも来たいもんはみんなおいで！ 出がらしでよければお茶ぐらい振る舞うよ」

「やっほー！ じゃあ俺、アキさんにメール入れる！」

アキラはスマホを取り出し、早速メールを打ち始めた。

「あたしはマサさんに声かけとくよ。そうだ、裏のアパートの早紀ちゃんも呼んでやろう」

「早紀ちゃん？」

意外な名前が出てきて首を傾げた美音に、ウメはちよつと心配そうに言った。

「ここに来るときに見かけたんだけど、なんだかしよぼくれてたからさ。しかも制服のまんま」

やっぱりウメさんもそれが気になったのか……と美音が思っていると、トクも首を傾げながら言

う。

「早紀ちゃんって、時々この商店街で買い物してる女の子か？」

「そうそう。よくご存じだね、トクさん」

「商店街で買い物をする若い女の子は珍しいから目につくのさ。見かけるたびに家の手伝いかな、

感心だな、って思ってた。そういや、俺も今日すれ違ったわ。いつも元気に歩いているのに、なん

かとぼとぼ……って感じに見えただぜ」

「変ね……私が会ったときはいつもどおりだったのに」

夕方、店の前を通っていったときは元気に声をかけてきた。それなのにウメたちが会ったときには、元気がなかったという。その間に何かがあったのだろうか……と美音はちよつと考え込む。

「まあ、あの年頃の女の子はいろいろあるよ。おおかた友達と仲違いなつかでもしたんだろう。美音坊と

馨ちゃんだつてちっちゃいころはしよっちゅう喧嘩して、そつぽ向いたりくついたりしてたじや

ないか」

五歳も離れていても、姉妹喧嘩というのはやっぱり起きる。同世代ならもつとだろう、というウ

メの言葉はそれなりに説得力があった。

「ま、あの子は生き物が好きだし、猫でも見たら元気になるだろうさ」

「そうだよ、猫は究極の癒いよし系だもん。猫と遊んで気分が変われば、元気が出るって。えーつと、



アキラさんにマサさん、アキさん、あとは……」

メンバーを数え上げていた馨はそこで言葉を切り、みんなの顔を窺った。おそらくタクとその飼い主を思い浮かべたのだろう。

「タクのとーちゃんはねえ……」

「美音さん、要さんの連絡先って聞いている？」

聞いているわけがない。名前を訊ねたことにすら自分で驚いたぐらいなのに、連絡先なんて訊くはずもなかった。

ふるふると首を横に振った美音に、アキラはさもありません、という顔で言った。

「タクは……欠席かな」

「しょうがないねえ……」

「でも、もし日曜までに、お店に来ることがあったら声だけはかけといてよ」

要が前に現れたのは三日前の火曜日。おそらく、しばらく来ないだろう。第一、声をかけたとしても、わざわざ休みの日に猫会に参加したりしないのではないか……

そんなことを思いながらも、美音はアキラの言葉に曖昧に頷いた。

+

週末までに要は現れず、タクは欠席となったものの、日曜日の午後、兄弟猫たちはウメの家の茶の間で再会を果たした。

とはいっても美音の予想どおり、猫たちに、自分たちが同じ母親から生まれたという意識は皆無。それどころか、自分以外の猫が三匹もいるという状況に戸惑っているようだ。家の中で飼われ、他の猫に遭う機会など滅多にないのだから、当然と言えば当然だった。

最初はそれぞれの飼い主から離れず、おっかなびつくりといった感じで周りを観察していた。そんな猫たちも、しばらくするとこの状況に慣れたのか、持ち前の好奇心であちこち探索を始め、やがて茶の間の外にまで進出するようになっていった。

家主の飼い猫であるクロは、突然現れた珍客に迷惑しているように見えたが、通常営業を貫くことにしたらしい。いつもどおりにウメのそばで微睡んでいたが、しばらくするとふっと目を覚ます。依然としてそこにいる客たちを『長つ尻だな』とでも言いたそうな目で見たあと、音もなく階段をのぼっていった。

マツジが、おれもおれも……とばかりに追いかけていき、ちよつとした小競り合いが発生。

クロにしてみれば『ついてくんない、わずらわしい!』といったところだろう。

追ったり追われたり、無視したりちよつかい出したり……そんな様子が茶の間、いや家のあちこ



ちで練り広げられ、人間たちはそれを見てはいちいち  
歓声を上げた。

「はあ……こりやまた壮観だねえ」

ウメが湯呑みを載せたお盆を手に、やれやれ……と  
首を振った。

ウメは台所にお茶を淹れに行き、戻ってきたところ。  
クロとマツジも茶の間に戻り、部屋の中には猫四匹と  
人間七人が勢揃いとなった。

呆れたような口調でも目はしっかり細めているから、  
状況を楽しんでいることは間違いない。

「うー、やめてチャタロウちゃん！ 今は上つてこ  
ないでー」

膝の上に既にクロがいるのに、さらにチャタロウに  
よじ上られそうになった馨が、嬉しい悲鳴を上げた。

馨は、暇を見つけてはウメのところに行つてクロと

遊んでいるから、クロとはすっかり顔なじみ。我が物顔で馨の膝に収まっているクロを見て、チャ  
タロウはどれどれ自分も……となった次第。

「チャタロウ！ クロにちよっかい出すな！ こっち来いって」

マサがかけた声に、ウメが笑う。

「そりゃチャタロウだつて、じいさんよりは若い娘の膝のほうがいいって」

「ウメ婆、なんてこと言いやがる！ あんたところのクロだつて、馨ちゃんのほうがよかつたん  
だろ？」

見ろよ、気持ちよさそうじゃねえか……と、マサが鼻息を荒くしたとたん、クロは薄く目を開け、  
周りを見回した。馨の膝からついつと下りると、ぐいっと背伸びをし、ウメのほうに近づいていく。  
「みゃあ……」

足下で甘えるように鳴かれたウメは、ちよいとお待ち、と声をかけてお茶を配り終わると、縁側  
のいつもの場所にすっと正座する。クロはすかさずウメの膝に上り、もぞもぞと体勢を整えたあ  
と再び居眠りを始めた。

「あちゃー！ やっぱ、あたしはただのピンチヒッターか！」

「残念ねえ、馨ちゃん」

情けなさそうな馨にアキが同情を寄せ、マサは思わず吹き出す。

「なんでえ、クロ。おめえ熟女好きかよ！」

「マサさん、それ全然違うし、そもそもウメさん、熟女と言うには熟しすぎ……」

「なんだって!?」

アキラが小声で入れた突っ込みに、ウメの鋭い視線が飛んでくる。

「気をつけな、若いの。ここいらの年寄りには、軒並み地獄耳なんだよ！」

「へいへい、失礼しやした！」

まったくよお……と頭を掻くアキラに、カンジが注進に及ぶ。

「ア、アキラさん！ やばいです！ マツジがミクにコナかけてます！」

「なんだと!!」

カンジの報告に、みんなが一斉にそちらに目をやった。

ミクはしばらく前から『接待』で出された餌皿の前に陣取って、悠然とあたりを見回していた。

生まれたときから兄弟より一回り大きかったが、甘い飼い主のおかげでさらに貫禄を増している。

猫としては平均より少々小さめであるマツジとの体格差はかなりのもの。それにもかかわらず、

マツジは果敢に、ミクにちよいちよいと猫パンチをくらわせている。

ミクはものすごく迷惑そうな顔になり、立ち上がって少し移動。けれど、マツジはしつこくついていって絡み続けた。

アキは、大物に挑む『我が子』が頼もしいとばかりに、ニコニコ見守っている。ミクの迷惑顔はどんどん深くなっていった。

「やめるよ、マツの字。ミクがいやがってんじゃねえか！」

アキラが見かねて止めに入ろうとした、まさにその瞬間、ミクは盛大にしつぽを膨らませ、「ふーっ！」と、荒く息を吐いた。

威嚇されたマツジは、あつという間にカーテンの裏に逃げ込む。アキが頭を抱えた。

「マツジー、あんた男でしょ？ なんて情けないのー！」

「ミク、おまえも、もうちよつとお嬢様らしくおしとやかにだなあ……」

「アキラさん、それは無理ってもんです。ミクは明らかにお嬢様じゃなくて女王様……」

「なんだと、この野郎！」

アキラが声を高くしてカンジを睨み付けた。しつぽがあつたら、きつとさっきのミクみたいに盛大に膨らんでいただろう。カンジはマツジ同様、カーテンの裏に逃げ込んでしまった。

「もう、お前らずつとそこで仲良くしてろ！」

『ジ』つながりでけっこうじゃねえか、とアキラが毒づく。カーテンの上の方と下の方から顔を覗かせるカンジとマツジをみんなで見つめていると、ピンポーンと呼び鈴が鳴った。

よっこらしよ、とウメが腰を上げ玄関に向かう。

「ああ、よくおいでだね。お友達も一緒？ いいよいよ、お入り」

「おじゃまします！」

元気な挨拶のあと、茶の間に入ってきたのは早紀だった。同じぐらいの年齢の女の子と一緒にいる。なんとなく見覚えがあるから、おそらくこの間、制服姿の早紀と並んで歩いていた子だろう。

「こんにちは、早紀ちゃん！」

「美音さん、こんにちは！」

「あ、そうだ、この間は可愛いクッキーをありがとう。すごく美味しかったわ」

「お姉ちゃん……この間って、あれ随分前じゃない」

鰻のちらし寿司の作り方を教えたお礼に、早紀がクッキーを届けてくれたのは土用の丑の日のすぐあとだ。今はもう冬になりかけているから『随分前』という馨の意見は正しい。

けれど、商店街で見かけたり、この間みたいに店の前で会ったりしても、お互い自分の用を足すのに忙しく、ゆっくり話をする機会がなかったのだ。

「お礼を言うのに遅すぎるってことはないでしょ？ 言わないよりずっといいわ」

「それはそうだけど……」

タイミングつてもものがあるでしょ、と馨は言う。早紀が、姉妹のやり取りにあわてて口を挟む。

「でも、お世話になったのは私のほうなのに、美音さんがお礼なんて……」

「まあまあ、いいじゃないか。お互いに『ありがとう』でさ。まあ、そこで場所を見つけてお座りよ。今、お茶でも淹れるからさ」

ウメが上手にその場を収めて、早紀たちふたりをちゃぶ台の脇に座らせた。

ふたりは早速、猫を目で追い始める。

ウメに膝から下ろされたクロと、再び馨の膝の取り合いをしていたチャタロウが、早紀の様子を窺っている。だが、チャタロウはそれ以上近寄らないし、早紀もただじっと猫を見ている。触つてみたいものの、逃げられるのも……といったところだろう。

見かねたマサが、ついつと立って行ってチャタロウを抱き上げた。

「ほらよ、チャタロウ。おめえは女好きだろう。若いお姉ちゃんに撫でてもらいな」

目の前に差し出された黒茶プチの猫を、早紀は目を輝かせて抱き取った。

「うわー温かい！ ほらほらリンちゃん、ちよつと撫でてみて！」

「ほんとだー。温かくて柔らかーい!!」

ひとしきり猫をいじくり回し、はつと気が付いたように、早紀は友人を紹介した。

「あ、こちらは私と同じクラスのリンちゃんです。『社宅』に住んでる……」

「社宅……?」

アキラが首を傾げた。この町に住んでいないアキラには、どこのことだか見当がつかなかったら

しい。

そんなアキラにマサが説明する。

「ちよつと行った先に、鉄鋼会社の社宅があるだろ？」

昭和中期、日本が高度経済成長のまった中であつたころ、地方から働きに出てきた人のために社員住宅が造られた。この界隈には他にそういった社宅がないため、付近の住民はその鉄鋼会社の社員住宅を、ただ『社宅』と呼んでいる。アパートタイプの独身寮だけではなく、家族向けの戸建てもあり、リンもそこに住んでいるらしい。

「あー、あそこね。でもあそこ、最近随分と人が減つたよな？」

「俺たちが行くのも、取り外しばかりです」

カンジがアキラの発言を裏付けるように言う。ふたりの仕事は電化製品の取付だから、新しい住民が入れば、エアコンなどの工事をすることになる。だが、くだんの社宅では引越すための取り外しばかりで、このところ取付工事をやつた記憶がない、とふたりは口を揃えた。

「そういえば、夜に電気がついてない家が増えた気がするわね……」

「実はそうなんです……」

美音の指摘に、早紀はちよつと言葉を切つてリンを窺つた。リンが小さく頷いたのを確認してから、また話し始める。

「あの『社宅』もうすぐ閉鎖になるんです」

「あそこもか……」

バブル崩壊のあと、急激な経営悪化で社宅を手放す企業が増えた。

くだんの社宅は、それでも何とか最近まで持ちこたえていたのだけれど、利用する人がどんどん減つていった。同じ会社の人たちが一つのところに暮らす『社宅』という形態自体が、時代にそぐわなくなつたのかもしれない。

そこに大きな震災があり、今度は老朽化した建物の安全性が危ぶまれることになつた。結局、この鉄鋼会社も自社保有をやめて、借り上げ制度に移行することに決めたらしい。

「じゃあ……お友達も？」

社宅を廃止するということは、そこに住んでいるリンの家族も引越すことになる。美音は、早紀にしては珍しく、断りなしに友達を連れてきた理由を察した。

「はい。リンちゃんちも、もうすぐ……」

「遠くへ？」

「そんなに遠くはないけど、学校はかわつちゃうんです」

このあたりには賃貸物件自体が少ない。引越すにしても少し離れた場所になってしまう。学校がかわれば、今までみたいには会うことはできなくなる。

だからウメに誘われたとき、早紀は嬉しい反面、迷いもしたのだろう。猫と遊べる機会と、残り少なくなつた友達との時間。困つた挙げ句、一緒に来てしまうことにした。駄目だと言われたら猫は諦めて、よそで遊ぶしかない。でもウメならきつと許してくれる……と信じてのことに違いない。「早紀ちゃんが元気なかつたのもそのせい？」

「あ……はい……そうなんです」

猫会を開くと決めた翌日も、美音は早紀を見かけた。美音に気付いて挨拶はしたものの、なんとなく気にかかることがあるような、思い詰めたような顔で去っていった。その原因は友達が転校してしまふことであつたのだ。

アキアカネが飛んでいたあの日、早紀はリンから引越すことを聞かされたという。

仲良しの友達が引越してしまふ前に、少しでも一緒に過ごしたい。着替える時間も惜しいほどで、本当はいけないとわかつていても、つい制服のままリンの家に行つてしまった。一緒にいる間はまだ元気でいられたけれど、帰り道でひとりになつたら落ち込んでしまい、俯きながら歩いてたところをウメやトクに見られたらしい。そのあとも、リンがいなくなつてからのことを考えては暗い顔になつて……

ウメは早紀とリンをちよつと見比べたあと、大きく頷いた。

「ああ、そういうことかい。気がねするんじゃないよ。今日の我が家は千客万来。この上、ひとり

やふたり増えたつて変わりやしない。まあ、気が済むまで遊んでいきな」

「ありがとう！」

昔は息子のソウタが何人も友達を連れてきたもんだ。やんちゃ坊主がそこら中を走り回つてたことを思えば、大人と女の子ぐらいいなんでもないさ、とウメは鷹揚な態度を示した。

その日、人と猫でいっぱいになつたウメの家からは、楽しい笑い声が聞こえ続けていた。

+

「タクちゃん、元気にしてますか？」

仕舞間際の客が二週間ぶりに現れたとたん、美音はそう訊ねてしまった。

ウメのおかげで、四匹の猫たちはすこぶる元気だと知つた。それぞれの飼主主に可愛がられてい様子がよくわかり、安心することができた。

そのことで逆に残りの一匹、タクのことが気になつてしまい、美音は要が来店するのを今か今かと待ち受けていたのだ。

「タク？ ああ、元気にしてるよ」

唐突に切り出された質問に、ちよつと驚きながらも要はスマホを取り出し、最近撮つたというタ

クの写真を見せてくれた。

以前見せてもらった写真よりも、身体つきが少し成猫に近づいたようだ。だが実際に見ているわけではないので、具体的な大きさはわからない。

「大きさ、どれぐらいになりました？」

「これぐらいかな……」

要が両手で示した大きさを、自分の手でつくってみて、美音はうんうん、と頷いた。タクの大きさはチャタロウとマツジの間、ちょうどクロと同じぐらいだった。

「じゃあ……みんなに追いついたのね」

もちろんミクちゃんは別格だけど、と笑いながら、美音は酒のグラスを用意する。

「最近、他の猫に会ったの？」

「ええ。ミクちゃんにちよつと運動させたほうがいいってことになって……」

美音は要に、ウメの家でおこなわれた猫会について話した。興味があるのかしら……という心配に反して、要は猫たちの様子をあれこれ質問を交えて楽しそうに聞いていた。

「で、ミクは運動できた？」

「ええまあ、それなりに」

ミクはマツジを威嚇して追い払ったあと餌皿の前に戻り、まさに女王の風格を醸し出していた。

みんなが持ち寄った猫用のおもちゃにもあまり興味を示さず、たまに他の猫にちよつかいを出されれば少しだけ相手をするものの、自分から動き回ったりはしない。

これでは意味がない……とみんなが眉を顰めたところで、猫会の本来の趣旨を聞いた早紀とリンが一計を案じた。

日頃からアキラに散々遊んでもらって猫のおもちゃには飽きていると見て取ったふたりは、ウメから新聞紙とスーパリーのレジ袋をもらった。ふたりの思惑どおりミクは、新聞紙やレジ袋が立てるかさかさ……という音に興味を示し、のっそりと立ち上がった。

離れたところに投げたり、猫タワーの上に放り上げたりすることで、ミクをちよこまかと動き回らせる。そうなると他の猫が大人しくしているわけもなく、都合四匹が早紀とリンの周りを駆け回ることになった。

大人たちは見ているだけで疲れてしまったが、早紀もリンも、そして猫たちも本当に楽しそうだったから、ウメが彼女らを呼んだのは大正解だったと言える。

「やっぱり若い猫の相手は、若い人間に限る」

それがその場にいた全員的一致した意見だった。

大人たちは、ふたりの猫使いと四匹の猫が織りなすショーを午後いっぱい楽しむことができた。おそらく、ミクも相当なカロリーを消費したことだろう。

さらにウメはアキラに、この町近辺で仕事をするときはうちでミクを預かってもいいと申し出た。「出かけに放り込んでくれれば、夜まで面倒見るよ。仕事が終わったら迎えに来てくれればいい。」

留守中、この子のためだけにエアコン入れっぱなしつてもエコじゃないしね」

「でも、ミクとクロがドタバタ始めたら、ウメさん大変だろ？」

「まあ、なんとかなるよ」

そうは言ってもなあ……とアキラは返事に困っている。ミクのためにはそのほうがいいのはわかっているが、ウメには負担に決まっている。アキラは少しためらっていたが、ふと早紀とリンに目を留め、恐る恐るといった感じでウメに訊ねた。

「これはちよつと、いやかなり勝手なお願いなんだけど、ミクを預かってもらうとき、このお嬢さん方に来てもらっちゃ駄目かな？」

運動させるために預かったんだから、なんてウメさんに無理させるのも辛いし、このふたりなら楽しみがてら面倒を見てくれそうだ。お茶菓子ぐらいは俺が用意するし……というアキラの言葉に早紀とリンは顔を見合わせ、ウメの反応を窺う。ウメはすぐさま、そりゃあいい、と賛成した。

「学校が離れても、たまには会いたいだろう？ 都合がつくときだけでいいから、猫たちの相手をして来てくれると助かるよ」

それを聞いた早紀とリンは飛び上がって喜んだ。実際にふたりは手を取り合ってびよんびよん跳

ね回る。

「ウメさん、それから、アキラさんもありがとう！ 私たち、リンちゃんが転校しちゃったらどこで会おうって悩んでたんです」

学校がかわったら休日しか会うことができない。早紀の家は夜勤明けの両親が寝ていたり、弟がいたりで落ち着かない。リンの家だって休日にお邪魔するのは忍びない。かといって中学生が外で友達に会うのに相応しい場所なんて思いつかない。ファストフード店に行くようなお金はもっていないし、駅前のショッピングセンターに出るにもバス代がかかる。

勉強がてら図書館に行ってみたらどうだろう、とも思ったけれど、近所にあるのは自習室があるような大きな図書館ではない。机と椅子は図書館の本を読む人のためのものだし、そもそもあそこはおしゃべりするところじゃない……

「でも、やつぱりリンちゃんとは会いたいし、ずっと仲良くしていきたいし……」

月に一度か二ヶ月に一度でいいから、ウメさんの家にお邪魔させてもらえればとても助かる、と早紀とリンは、ウメに抱きつかんばかりだった。

そんなふたりを見てアキラが言った。

「本当に気の合う友達って案外見つからないし、見つけたときはうんと大事にしたほうがいい。会えなくなると、なんとなく離れちまうのつてもつたないじゃん。ミクの面倒を押しつける俺が言



うのものなだけど、たまにでもウメさんちで会わせてもらって、ずっと仲良くしていけるといいな」  
ま、俺だって今こいつがいなくなったらけっこう寂しいしな、とアキラはカンジを見て笑った。  
カンジは照れくさそうに赤くなり、早紀とリンは大きく頷いた。そしてその後、悩みが解決した  
ふたりは存分に猫たちと遊び回ったのだった。

「あのふたり、本当に仲良しだったらしくて、息もぴったり。まるで姉妹みたいでした」

「そうか。じゃあ、ウメさんの家は兄弟だらけだったんだな」

「そうですね。猫たちに、アキラさんとカンジさん、早紀ちゃんとリンちゃん……」

「それに、本物の姉妹の君たち……でも、猫たちに兄弟って自覚はあったのかな？」

「どうでしょうねえ……」

夕方になって、客たちがそれぞれの猫を連れて帰ろうとしたとき、クロが玄関までついてきた。

ウメが「おや、お見送りかい？ 珍しいね」と言ったところを見ると、いつもは見送りなどしない  
のだろう。

クロは客たちが抱えたケージを見上げて「みゃあ……」と鳴いた。そのか細く絞り出された声が  
なんだか寂しそうに聞こえたのは、美音の『そうであってほしい』という願望のせいかもしれない。  
『こいつら、前に会ったことがあるような気がする。もっと一緒にいたいな』なんて感じていれ

ばいいなあ、と思いました」

三匹の猫は、ケージの中でクロの声に応えるように鳴いた。美音にはそれが、別れを惜しんでい  
るように思えたのだ。

兄弟だと知らなくても、なんとなく一緒にいたい、支え合いたいと思う気持ち。人の場合、それ  
は絆という言葉で表される。美音たち姉妹だけでなく、アキラとカンジの間にも、早紀とリンの間  
にも絆はきつとある。だからこそ、別れに戸惑い、一度結んだ絆をなんとか保とうとするのだ。同  
じような気持ちだが、猫にもあるのかもしれない。いや、あつてほしい――

「そうかもしれないね……」

要の呟くような声が聞こえて、美音は自分だけが話し続けていたことに気付く。

うわあ、ちよっとしゃべりすぎちゃった……と、顔を赤らめつつ、美音は要に声をかけられなかつ  
たことを詫びた。

要はただ微笑んで頷き、参加できなかったことを気にしている様子は見せなかった。

猫の話題に区切りをつけて、美音は冷蔵庫を開けて酒を選ぶ。

要は、美音が取り出した酒瓶のラベルに目を留め、続いて自分の前に置かれている突き出しの小  
鉢をしばしばと見た。

「なるほど、そうきたか……」

「え？」

「なんでしよう？」と惚けたように応える美音に、要はにやりと笑った。

「酒は『群馬泉』、突き出しは蒟蒻とネギ。本日は、上州づくしだな」

「目敏いですわね……」

ちよつと悔しそうにして見せたものの、美音は内心では『上州づくし』に気付いてくれたことに大喜びしていた。

上州は群馬の旧名である。秋が終わりに近づき、群馬が産出量全国一位を誇る蒟蒻芋が旬を迎えた。昔は蒟蒻といえは生芋から作るものだったけれど、今では蒟蒻芋を粉末にしたものを使って作るので、一年中生産が可能。そのおかげで旬という概念はなくなったものの、美音はやはり蒟蒻芋が旬になる今時分が、蒟蒻の旬だと思っている。

そしてネギは、蒟蒻と同じく群馬特産の上州ネギ。上州ネギは下仁田ネギと長ネギを掛け合わせたものであるが、こちらも冬に旬を迎える。この二つを甘辛く炊き合わせた煮物が本日の突き出しだった。

要は、お好みで、と添えられた七味をばらばらと小鉢に振りかけ、まずは蒟蒻を口に入れた。

「蒟蒻は不思議だな……」

「そうですか？」

「だってこれ自体には大して味もないだろう？ 表面だつてつるつるで調味料なんて寄せ付けけない感じがする。それなのにこうやって煮物にすると、ちゃんと味を吸う」

「そういえばそうですわね」

ちよつと君に似てるな……と言いついそうになる口を、要は必死で閉じた。いらぬことを言つて怒らせて、また苦いゴーヤでも出された日には参ってしまう。

蒟蒻は手ちぎり、あるいはスプーンで削り取ったのかいびつな形をしている。そのでこぼこの断面に調味料が上手く絡んでいる。穏やかな甘みは、砂糖ではなくみりんをきかせたからだろう。

ネギの甘みが消えたあと、わずかに残る七味のびりつとした味。それを追いかけるように酒を含んだ要は、予想外の味わいに面食らった。

「あれ？」

「どうかしましたか？」

「この酒……こんな味だつたつけ……？」

以前よそで呑んだときは、もう少し酸味が勝っていた。

この酒を造っているのは島岡酒造という蔵だ。酒蔵に自然についている乳酸菌を使った『山廃造